

# 雪浪洪恩の著述の成立論的考察

——『谷響録』と『雪浪集』を中心として

大 澤 邦 由

## 一、はじめに

雪浪洪恩（一五四五—一六〇八）とは万暦年間の金陵（南京）を中心として活動し、尽掃訓詁の説法等を通じて士大夫たちから熱狂的な支持を受けて明末期の仏教の中興に貢献した僧である。彼は、当時、万暦三高僧（憨山德清、紫柏真可、雲棲株宏）と並び立つような評価を受け、さらに中国仏教を代表して宣教師のマテオ・リッチ（一五五二—一六一〇）と論争を行うなど、当期の仏教を担った中心的人物の一人といえる。

しかし、その影響に比して雪浪はこれまで少なくとも国内ではほとんど注目されてこなかった。このことは彼に対する毀誉褒貶の評価、特に、例えば吉川幸次郎氏が説くような軽佻という否定的な評価が影響していると思われる。そこで、筆者は「雪浪洪恩の行状とその評価について」<sup>2</sup>において特

に彼の戒行の実際とそれへの他者からの評価を中心として、次のような考察を行った。まず、雪浪の功績と称えられる事柄について先行文献等によって整理したのち、特にその軽佻とされる戒行の問題について、沈德符『万曆野獲編』「雪浪被逐」の記事や憨山德清からの視点、および鄒迪光撰「華山雪浪大師塔銘」などの記述をもとに考察した。この考察から見えてきたのは、雪浪には観劇や妓楼通い、妓女のような服装の妙齡の女性を侍者のように従えていたといった戒行に係る否定的な疑惑が存在し、それらの戒行問題のうちの一部は事実を含むものであったと思われるが、そのような行いを含めて雪浪を支持する士大夫からは受け入れられ、信仰されていた。

雪浪に対する評価は肯定否定の両面がある。そのこと自体は、物事を複数の異なる視点から見ると異なる造形が見られるように、換言すれば、それぞれの人の社会的背景というバイアスによって、ある人の人物評価はそれぞれ異なる

たものになるといふような意味において、当然のことともいえる。ただし、雪浪の場合には特に明末に特徴的な輕佻という氣風に沿うような言動が散見されることから、他者からの主に否定面の評価を加味して眺めた場合、雪浪は士大夫へ仏教を広めるため彼らに迎合し、彼らの狂禪の先導者あるいは伴走者となつていたといふような推測までしてしまう。實際、雪浪が交流した士大夫や文化人は例えば王禪登や屠隆、董其昌、陳繼儒、馮開之、沈顥、管志道といった名のある人がいて、人によつてその「狂禪」の度合いの強弱はあるとはいへ、仏教に近づき名教に反したとして一面においてその多くは批判された人々である。

しかしながら、翻つて雪浪の視点から考えた場合、つまり、彼自身の言葉によつて彼の思想を見ようとした場合には別の情景が見えてくる。雪浪には『谷響録』、『雪浪集』、『雪浪続集』という詩文を中心として編纂された三種の刊本が現存している。そこに収められる詩や文章等からは伝聞ではない雪浪の主張を見ることが出来る。それらを読んで現時点で筆者が気が付いた点を挙げれば次のようになる。説法の内容について記録されるうちの一つでは經典だけではなく、禪宗祖師の言葉を使った説法を展開していること、修証論については頓悟主義には否定的であつて漸修的な穩健的立場を持つていふこと、經典の熟読および坐禪、作務などの漸修的行為を重

視していたであろうこと、詩僧としての一面を持ちつつ弟子を多く育てたことで、仏教教団内の詩文重視の風紀に少なからぬ影響を与えたと思われる彼も、一方では僧徒が修行を怠つて翰墨を重視しすぎた傾向に対しては否定的な意見を表明したこともあつたこと、等である。

これらのことについては今後さらなる検討を要するが、彼の著述の内容から知ることが出来るのは、雪浪は一面において過度な狂禪の風潮に歯止めをかけようとしていたことであり、このようなことから考えれば、単なる輕佻の一言で雪浪を評価することは妥当ではない。

しかし、先行研究では上述の三種の著述の成立についての書誌学的検討は『谷響録』を除いてはほとんどなされておらず、『谷響録』の成立については後述のように検討がなされているものの、その内容は再検討が必要であると思われる。このことは雪浪の生涯及びその思想的変遷を探る上での障害となつている。つまり、『谷響録』や『雪浪集』及び『雪浪続集』が、それぞれいつどのように編纂され、そこに含まれる内容はどのような性質を有するのか、このような問題を明らかにすることによつて雪浪の思想が変化していった可能性を論ずることが出来るようになる。

特に筆者が注目するのは、雪浪の氣質や生活態度が中年期以降に変化したという点である。そのことは、『憨山老人夢

遊集』や錢謙益「跋雪浪師書黃庭後」等によって知られる。憨山德清（一五四六—一六二三）「雪浪法師恩公中興法道伝」は次のように雪浪の消息を伝える。

雪浪は裕福な家に生まれたため、人はみなその習性が軟弱であると見做していたが、中年に至るとその品行は苦行を重んじた。江東大中に茶菴を建立した際には、雪浪みずから水をかつぎ毎日「茶を」供してやまず、門人はつき従っていたため、説法もやめなかった。すると、その軟弱さも日増しにたくましくなっていた。日頃より十方に粥飯の縁を結びたいと思っていたが、晩年には呉の望亭にて接待院を開き、往来する人を受け入れ、みずから柴刈りや水くみを行い、器具を執って、学人を率いて作務を行った。昼には飯を供し、版には沐浴を与え、夜には説法をした。「法施と財施の」二つの利他行を同時に行ったのだ。三呉（広く江南の呉の地域を指す）の人々はみな帰依していき、一闡提も護法へと転じていった。

（公生於富室、人皆視為性習軟暖、及中年操履、篤於苦行。於江東大中立捨茶菴、公自担水、日供不倦、門人相從、説法不輟。即弱骨者、日益強矣。居常思結十方粥飯縁、暮年就呉之望亭、開接待院、接納往来、躬操薪水、執作具、領学人作務。日則齋飯、晚則澡浴、夜則説法、

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

二利並施。三呉之士、翕然信向、即闡提亦轉為護法。）

ここで憨山は雪浪が幼少期に裕福な家に生まれたことに由来する軟弱な様子から、「中年」以降には「苦行」を重んじるように変わり、自ら率先して作務を行うようになったことを述べている。「中年」とは一般には三十代から四十代前後を指すと思われるが、それはいつ、どのようなきっかけがあった思想的転換を果したのか、あるいは雪浪が南京の居所を追われたことはこの事に関係あるのか、これらのことは塔銘や憨山の上文などからは知ることができない。

以上のような観点から、本論では雪浪の著作について成立論的観点から検討を行う。

## 二、雪浪の著述の検討

前述のように、雪浪の生涯などの研究は、廖肇亨氏をはじめとして主に海外において行われてきたが、彼の著作の書誌学的考察が不足していることにより、彼の生涯や思想の変遷の著作についてその成立を検討することは、彼の生涯や思想の解明のために必要な手続きといえる。

雪浪は積極的に著作を残すことはなかったようであるが、それでも主に彼の詩文を集めた著述として『谷響録』、『雪浪

集』、『雪浪続集』の三種が今に伝わる。本論では雪浪の思想や生涯を研究するための基礎資料の検討として、特にこの三種の著述について成立論的観点から検討する。

これらを検討するに先立ち、それ以外の雪浪の編著についてここで若干の検討を行う。雪浪の著作には経疏として、『楞嚴経』及び『般若心経』に対するものが存する。

『楞嚴経』に対する注釈である「雪浪楞嚴解」は完本としては現存が確認されず、刊行もされなかったものと思われるが、その一部が錢謙益『楞嚴経疏解蒙鈔』に抄録されている。これは雪浪の経疏として残る数少ないものの一つである。

錢謙益（一五八二—一六六四）が本書を抄録するに至った経緯については、彼が『楞嚴経』の注釈書に対して解題を行った「古今疏解品目」にて次のように記される。

雪浪三懷法師洪恩経解科判一卷（中略）人が〔著書を〕頼んでも、師は微笑むだけであった。師は文字からの解脱をしていたため、本をあえて著さなかったのである。〔雪浪の〕没後も講席は盛んであるが、含蓄ある言葉というものは絶えてしまった。世に伝わって学ばれている雪浪の言葉は、しばしば仮託されており、余計なものをつけ足してしまつて、真実の姿が見失われている。私は亡くなった友の陸氏の小箱の中から、故紙の一束を見つけた。題は「雪浪楞嚴解」という。經典の筋道に対する

理解は煩瑣でなく要を得ており、科判の一章は特に並ぶ立つものがない〔ほど優れている〕。その内容を見ると、要領をまとめており、指によって月を見るようなものだ。（中略）知己はすでに世を去り、素晴らしい教えも残っていない。ひとまず残編によって奥深い教を残しておく。

（人或謂之、微笑而已。師既擺落文字、不肯著書。沒後講席雖昌、微言中絶。世所流传誦習、往往標記錯雜、附会失真。蒙于亡友陸氏篋中得故紙一束、題曰「雪浪楞嚴解」。枝経理解要言不煩、科判一章、尤為孤迥。觀其指意、以謂撮要提綱、因指見月。（中略）郢人已逝、斷輪不伝。聊借殘編、以存玄義。）

錢謙益のこの記述からは、以下の三点が確認できる。

第一に、錢謙益はしばしば齒に衣着せぬ批判を行ったが、「雪浪楞嚴解」は簡潔に要点をまとめているとし、特にその科判に対しては高い評価を与えた。この科判は「雪浪恩公楞嚴科判略図」として『楞嚴経疏解蒙鈔』に収録される。長水子瑿や温陵戒環をはじめ、他の注釈者たちの『楞嚴経』の科判は七科や五科といった大科を立て、『楞嚴経』の文句の主従関係について考察を行い、科判によって主たる内容の説明を行おうとするのに対して、雪浪の科判は主観的な解釈を科判に入れない簡潔なものとなっている。

第二に、雪浪洪恩は書物を著そうとはしなかったが、雪浪の没後、多くの言葉が雪浪に仮託されて伝えられたと錢謙益は述べる。換言すれば、雪浪の言として伝わる語や文章には仮託されたものが含まれることを示唆しており、雪浪の言や著作と伝えられるものの真偽は検討を要する。

第三に、錢謙益は故人である友人の陸氏の箱からたまたま「雪浪楞嚴解」という故紙一束を見つけ、それをもとに『楞嚴經疏解蒙鈔』に抄録した。

第二と第三の点の間には矛盾があるようにも見える。つまり、雪浪は著作を著そうとしなかったにも関わらずなぜ『楞嚴經』に対してのみ詳細な注釈が存するのだろうかという問題である。この点については、憨山徳清に宛てて記した手紙「与清兄書」（『雪浪集』巻下）に『楞嚴經』注釈への意欲が雪浪自身の言として記される。

私は『楞嚴經』について、わずかながら進歩したようなどころがあった。さらに山中に籠つて、一家言をなし、それを名山に隠し、知己がそれによって仏恩に報いることを俟ちたい。しかしまだ筆をとっていない。諸家の注釈の文章は、すべて自分の見解の表出であり、如来の本懐ではない。あたかも管から豹を覗くのは一見にしかず、盲者が象を撫でも全身を把握することはできない。まさに仏が一音で教えを演説したのに、衆生はそれぞれ自

分の解釈によっているのだ。

（弟楞嚴一經似有微長、亦欲掩関山中、成一家言、藏之名山、以俟知己用報仏恩、但尚未發軔耳。又見諸家章疏、皆出自己見、非如来本懐。管中窺豹不無一見、盲人摸象、未諳全身、正以仏以一音演說法、衆生各各随所解。）

雪浪はここで、他の『楞嚴經』注釈書に対してそれぞれ自己の解釈に過ぎず、如来の思いとは異なる」と批判し、自らは『楞嚴經』について得るところがあったため、それを書として残そうとしていたと述べている。

雪浪が『楞嚴經』を重視していたことは、弟子の一雨通潤（一五六五—一六二四）が「楞嚴合轍自序」において、雪浪の説示として次のように記録していることから確認でき

師（雪浪）はおっしゃった。如来の教えは、根源は一つであるのに、流派は千差がある。しかるに『楞嚴經』は方法を統べて児孫となし、群經を包摂して眷属となすものである。文は十卷（と短い）が、実は大藏經の総序なのである。教法に志すものは最初に読まなければならず、かつ熟読しなければならない。

（師曰、如来教法源委不二、而流派千差。然楞嚴一經、統方法為児孫、撰群經為眷属。文雖十卷、実大藏之都序

也。有志教法者、不可不先読、又不可不熟読<sup>(2)</sup>。）

通潤は、雪浪の説法として『楞嚴經』がすべての經典を包摂するため、教えを志すものは最初に熟読しなければならぬと説いていたことを記録する。このように、雪浪はこの期の他の仏者と同じく『楞嚴經』を他經に比しても非常に重視していたようである。『楞嚴經疏解蒙鈔』に記される「雪浪楞嚴解」の逸文は、その出処が必ずしも明確ではないものの、雪浪自身が記したものとみてよいだろう。

『楞嚴經疏解蒙鈔』に引用される「雪浪楞嚴解」は、「雪浪恩公楞嚴科判略図」のほかに「雪浪云」等として四九箇所程の逸文が確認できる。それに対する錢謙益の見解をも参考に「雪浪楞嚴解」の特徴を述べれば、次の点が挙げられる。第一に雪浪の説法は訓詁を排したものと評されるが、『楞嚴經』解釈にあたっては、温陵戒環『楞嚴經要解』や憨山徳清『楞嚴經懸鏡』の影響があり、他の注釈書の内容を全く無視したものではない。第二に、台家への批判を行っており憨山徳清が天台の三觀を援用したのに対して雪浪は用いなかった。第三に、難読箇所を単純化し、わかりやすい言葉で解釈している<sup>(3)</sup>。これらの点についての詳細は稿を改めて論ずることとする。

『般若心經』の解釈を述べた『心經説』は『新纂大日本統藏經』第二六冊に収録される。これは訓詁的注釈ではなく、

その解釈を述べた説法的な性格を有する短文であり、『谷響録』B部分（後述）や『雪浪集』にその一篇として収められていることから、その成立は万曆二十年（一五九三）、あるいはそれ以前に、説法されたものの記録である可能性が高い。

雪浪自身の著書ではないものの、ほかにも唯識典籍をまとめた『相宗八要』は雪浪が唯識学の文献を選びとって唯識学を学ぶものの階梯として示したものである。明昱『相宗八要解』の序文である聖行「敘高原大師相宗八要解」は「余は因みに憶うに昔、白下（金陵）に雪浪恩公、宗教を演説するに、特に大藏中より八種を録して人に示し、以て相宗を習う者の階梯と為す、是れ『相宗八要』と謂う（余因憶昔、白下雪浪恩公演說宗教、特從大藏中録八種示人、以為習相宗者之階梯。是謂『相宗八要』）」<sup>(4)</sup>という一文があり、『相宗八要』は雪浪が南京にて講經をした際に、唯識の初学者が段階的に学ぶものとして唯識学の八種の經典を示したものだと思われる。その八種とは明昱『相宗八要解』に拠れば、「因明入正理論」、「大乘百法明門論」、「八識頌」、「唯識三十論」、「觀所緣緣論」、「六離合積」、「觀所緣緣論積」、「三藏大師真唯識量」からなる。



図一・国立公文書館内閣文庫蔵『谷響録』内題部

『谷響録』の版本は、現在確認できるものが国内外含め内閣文庫（国立公文書館蔵）所蔵本のための孤本であり、活字や

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

影印による出版や電子化公開はされていない。この版本に対しては、廖肇亨「雪浪洪恩初探——兼題東京内閣文庫所蔵『谷響録』」<sup>10</sup>がその紹介と解題を行っている。本論ではこの研究を基礎としつつ、改めてこの版本の成立について考えてみたい。

国立公文書館の所蔵目録には次のように紹介されている。

国立公文書館内閣文庫所蔵 木村兼葭堂、昌平坂学問所旧蔵 刊本、刊行者、刊行年不明、〔明万曆刊〕<sup>11</sup>

この目録の記載では、本書は明代の万曆年間に刊行されたものと推定されている。駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』にも掲載されている。

谷響録 附雪浪法師恩公中興法道伝

②一冊 ③明、洪恩（雪浪菴）、憨山徳清（附） ④明、万曆二一（序）刊 ⑤内閣 ⑦宰官居士等交友トノ応酬ヲ集ム、徳清ノ法道伝ノ外、増上居士鄒迪光ノ雪浪大師塔銘ガアル

これらの目録類では詳細には書誌学的な調査は行われていない。

そこで本書の内容を以下に確認していこう。本書の内容は、形式上では未分巻であるが、以下の各部より構成される。

	内容	丁数・版心題	備考
A	陳繼儒「谷響録序」	計三丁 版心題…「谷響録 序」	年記…「万曆癸巳（二一年（二五九三））四月 仏歡喜日」
B	内題…「谷響録」 内容は董其昌や陳繼儒、陸樹声などの士紳や性濂などの法華経講経法会への請書や書問、及び雪浪の答書。および「心経説」や「護諸童子経跋」など法語や雑文。計三二篇余（二丁落）。	計三六丁（第三二丁落丁） 版心題…「谷響録」	「護諸童子経跋」（二〇丁裏）には「癸巳四月 仏歡喜日」「浄頭問法記」（三二丁表）には「癸巳四月廿有一日在輪藏閣」といったの撰述時期の記載があり、明記されているものはすべて万曆二一年の撰述。
C	内題…「雪浪統集」「雑著」 内容は「題堆紗観音像讚」などの讚や詩及び法語等、計三三篇。	計一三丁 版心題…「谷響録」	撰述年に関する記載なし。
D	憨山德清「雪浪法師恩公中興法道伝」	計一六丁。 版心題…「雪浪小伝」	
E	鄒迪光「明故華山雪浪大師塔銘」	計六丁、うち第六八丁落丁。 版心題…「雪浪塔銘」	
F	性濂跋文	計一丁 版心題…「谷響録 跋」	年記…「万曆癸巳歲四月」
G	志若識語	計一丁 版心題…「谷響録 跋」	志若識語の版心の丁数は「七」と記される。



序文の著者である陳繼儒（一五五八—一六三九）は董其昌と親交があり、彼と並び称された著名な文人で、『明史』卷二九八に伝記がある。二九歳にして儒服を焼いて官を辞し、本書『谷響録』の編集地でもある小崑山（現上海市松江區）に隱居をしながら書画や詩文をなした。なお、『谷響録』には陳繼儒のほかにも、董其昌、陸樹声といった著名な文人の雪浪への書信も収録されており、彼らの仏教理解を知る資料の一つともなっている。

本書の成立に関しては陳繼儒の序文と性謙の跋文が参考になるが、以下に記す通り、現存する版本は、これらの序文や跋文が記された万曆二十二年に編集刊行された版本とは異なる。

序文や跋文によれば、本書は当初、小崑山の法会を記念して編集刊行された。この法会は雲間小崑山泗洲塔院の僧である性謙によって挙行されたもので、大檀越や徒弟とともに、四方の大徳を招き、三年間の浄業禪期が催されたという。その円満成就に際して万曆二十一年の初め、金陵から当時すでに名声の高かった雪浪を招いて法会が行われた。B部分の冒頭に掲載されるのは、董其昌や陳繼儒、陸樹声などの士紳や性謙等からの雪浪への再三再四の招聘書とそれに対する雪浪の返答である。その上で、性謙は跋文において『谷響録』の刊行について次のように記す。

郡中の護法の大檀越和尚（雪浪）の応酬や機縁のわずかなことばや文字は、捨て置くには惜しく、ひそかにみずからこれを記録し、『谷響』と名づけた。出版に付すると、堂中の大徳からは寄付を頂いた。この本は山門の常住とし、それを同好の人々に送った。

（郡中護法大檀越和尚酌暢機縁片言隻字、不忍棄置、竊自録之、名曰谷響。寿諸剗剗、而堂中大徳為之助喜、以為山門常住、以貽同好。）

このような跋文や序文の記述から、『谷響録』は当初、雲間小崑山にて行われた法会における雪浪の講経や士大夫とのやり取りの記録を中心として万曆二十一年四月頃、性謙を中心に編纂刊行されたものと知られる。

なお、性謙が「竊自録之、名曰谷響」と述べるからには、本書の刊行に雪浪自身は関与していないと読むのが自然と思われるが、廖肇亨氏は『雪浪統集』所収の詩に「谷響人間世」という句があることから、この句は本書を指しており、雪浪自身が「谷響」という命名に際しても雪浪が命名した可能性が極めて高く、少なくとも雪浪の許可はとったであろうと推測している。

しかるに、現存の内閣文庫本は万曆二十一年に刻された刊本ではない。それは、雪浪没後（雪浪の示寂は鄒迪光「華山雪浪大師塔銘」によれば万曆三十六年十一月五日<sup>⑤</sup>）に成立した

憨山「雪浪法師恩公中興法道伝」や鄒迪光の塔銘も同版本には含まれるからである。このことから、現存の『谷響録』は、雪浪の示寂した万曆三六年以降に再編されて刊行されたものと知られる。

ここで考えなければならぬ問題は次の諸点である。塔銘等明らかに雪浪の没後に記された部分（D部分以降）を除き、当初の刊行の内容と現行本に内容的差異はあるのか、当初の内容は果たしてB部分だけなのか、あるいはC部分も含まれるのか、そしてB部分が当初の『谷響録』と相違ないといえるのか。

廖肇亨氏は再編集とその刊行について、Gの識語が参考になると述べる。この文章は行草にて記されており、判読するのが容易でないとしたうえで、次のように推測する。

その言によれば、今の内閣文庫蔵本「谷響録」は雪浪没後に、後人により新たに編纂された新本であり、その最初の『谷響録』は附録を除いた二巻本で、附録は間違はなく後人が付加したもので、付加したのは古松あるいは志茲（？）二人のうちのどちらか（前者の可能性が高い）である。つまり、当時小崑山で雪浪が講経した後に行きされ、性謙が出版した『谷響録』は現存の『谷響録』の底本である。両者の差異は性謙の刊本が現存しない（あるいは未発見）ことにより更なる比較はできないが、附

録の部分を除き、両者の差異は大きくないだろう。（筆者<sup>16</sup>）

廖肇亨氏は雪浪の生涯に関わる綿密な研究をほじめて行った研究者であり、この周辺の研究に多大な貢献をなしているが、この推測に関して言えば、以下に記す理由により再検討を要する。

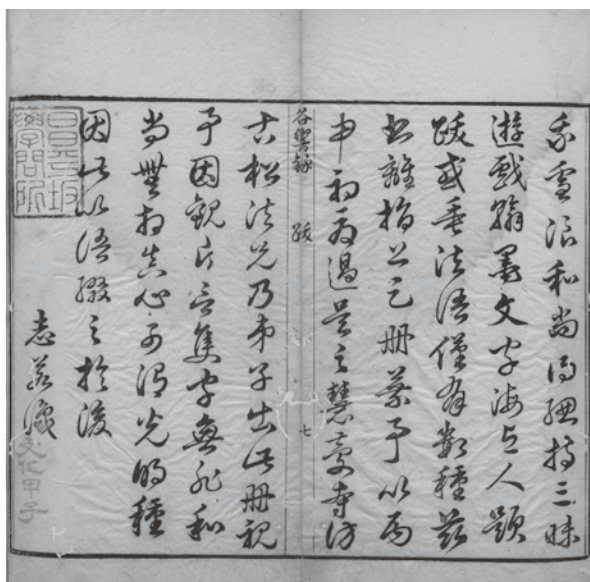
そこで筆者は改めて行草で記されたGの識語（図二）の解説を試みた。筆者も草書の解説を得意とはせず、解説にあたっては駒澤大学禅文化歴史博物館学芸員・塚田博氏にご協力をいただいた。本文に句読点を施して読んでみると以下のとおりである。字の判別が難しく、中には読み切れない部分も残るため、専門家のご批正をいただきたい。

我雪浪和尚得総持三昧、遊戯翰墨文字海。与人題跋、或垂法語、僅有數種。茲出離指上已（？）冊葉。予以丙申初夏、過吳之慧慶寺坊古松法兄、乃弟子出此冊視予、因觀片言隻字、無非和尚無相真心、可得光明種。因此以語綴之於後。

志若識

「已」に関しては読み切れず、後考を俟ちたい。これを讀み下せば以下の通りとなる。

我が雪浪和尚は総持三昧を得、翰墨の文字海に遊戯す、人に与えた題跋、或いは垂るる法語は、僅かに數種有る



図二・国立公文書館内閣文庫蔵『谷響録』志若識語（全）

のみ。（茲れ指上より出離し已に（？）冊葉たり。）予、丙申（万曆二四年）初夏を以て、呉の慧慶寺坊の古松法兄を過ぬるに、乃ち弟子、此の冊を出し予に視す、片言隻字を觀るに因み、和尚の無相の真心に非ざるは無く、

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

光明種を得るべし。此に因りて以て語して之を後に綴じ

る。

志若識す

まず指摘すべきは、廖氏が「志茲（？）」と推測する識語の作者は、「志若」を指すことである。志若は憨山徳清の「耶溪若法師塔銘」（「憨山老人夢遊集」卷三二所収）があり、『新続高僧伝四集』卷二〇にも立伝される。諱は志若、字は耶溪、二六歳（万曆七年（一五七九））に雪浪が南京にて開法すると聞きつけて参じ、一二年の期間にわたって雪浪について経論を学んだ後、自らも講經を行い、万曆四五年（一六一七）に示寂したとされる。

識語本文を確認すると、「茲出離指上已（？）冊葉」の文意は判然としないが、そのほかの箇所からこのおおよその文意はわかる。ここで志若が述べるのは、彼が丙申（万曆二四年（一五九六））に呉の慧慶寺に古松法兄を訪れた際、その弟子から雪浪のおそらく題跋や法語を内容とする冊子を見せられ、感激したということである。丙申とは万曆二四年（一五九六）、雪浪五二歳の年にあたり、『谷響録』の当初の刊行から三年後である。当然この時点で塔銘などの編纂は行われていないため、雪浪没後に行われた『谷響録』の再編とこの志若の跋文を関連付けることはできない。したがって、この文章から、古松あるいは志若が『谷響録』の再編集に関

わったということが知られるという廖肇亨氏の推測は当たらないものと思われる。また、『雪浪集』が編纂されるのは後述のように万暦二十六年以後のことであると想定されるので、『雪浪統集』と題されるC部分に志若が万暦二十四年の時点で関わったとも考えにくい。

では「附録の部分を除き、両者の差異は大きくないだろう」とする廖氏の推測はどうであろうか。これに関して筆者はB部分の大半は当初の編纂であるが、C部分の「雪浪統集」と題される以降の部分は、当初万暦二十一年に性謙が刊行したもものには含まれないものと考ええる。その理由はC部分の題が「雪浪統集」とされること以外には次の二点である。

第一に、『谷響録』の内容について、B部分のうち、年次の明らかなものは小崑山での法会の開かれた万暦二十一年のものであり、内容も大半は士庶とのやり取りや法会の説法の記録であり、陳継儒「谷響録序」や性謙の跋文の内容に添うものであるが、C部分の「雪浪統集」と題されて以降は内容もそれとは異なり、賛や偈や詩等が主となっている。

第二に、『谷響録』と『雪浪集』とを比較すれば、B部分には『雪浪集』と重複する内容が多いが、C部分には『雪浪集』や『雪浪統集』には重複するものが見当たらない。この点については次に述べる『雪浪集』の検討において詳述する。

『谷響録』のC部分「雪浪統集」の編纂が誰の手によって

行われたか、それが塔銘等の編入と同時期に行われたものであるかは不明である。ただし、この点について一つの示唆を与えるのは、後述する管覚僊編『雪浪統集』との関係である。廖肇亨氏は『谷響録』中の「雪浪統集」（上掲の表中のC部分）は現在伝わる『雪浪統集』と多くの内容が重複すると指摘しているが、筆者の調査では、『谷響録』C部分と管覚僊編『雪浪統集』（後述）における内容的重複は全く確認できない。しかしながら、版式や撰号には共通性が見られる。つまり、両者の書式において版心や魚尾、および四周双辺八行十七字という特徴は一致し、「明雪浪菴釈洪恩著」という撰号も一致する。このような共通性は、『谷響録』の刊行が管覚僊編『雪浪統集』の成立刊行時期と思われる万暦四十三年（一六一五）に近く、さらに『谷響録』の編纂や刊行にも管覚僊が携わった可能性があることを示している。

## 二二二、『雪浪集』

- ① 二巻、刊本、劉覲文「雪浪集叙」（万暦二十六年（一五九八））、通澤校刻、『四庫全書存目叢書』集部一九〇所収

- ② 一卷、写本、劉覲文「雪浪集叙」（万暦二十六年（一五九八））、通澤校刻、『禪門逸書』続編第二冊所収

『雪浪集』にはこの他に、京都大学図書館所蔵本があり、『新纂禅籍目錄』に「雪浪集」として「一冊、明洪恩（雪浪大師）集、写、京大<sup>19</sup>」と掲載されるのがそれにあたるが、筆者は京都大学図書館所蔵本と②を比較したところ、この本は影印本である②の底本に当たることが確認された。

①の版本の内容は上下二巻よりなり、上巻には計二二二篇ほどの詩や賛、偈等を収め、下巻には二八篇の法語や跋文などの文を収める。「巻上」や「巻下」は版心のみに記され、内題下には分巻を示す記載はない。上下巻ともに内題を「雪浪集」とし、その次の行に「雪浪菴比丘洪恩著 門弟子通澤校刻」と記される。

②は一卷のみの写本であって、版心は存在しないため、巻数表記はない。内容は劉觀文「雪浪集叙」を含め①の巻上に相当する行数や改行などの書式も①と同様であり、「雪浪菴比丘洪恩著 門弟子通澤校刻」との記載も一致する。つまり②は①の上巻部分のみを書写したものであろう。

これまで本書の成立については特に検討されてはこなかった。しかし、『谷響録』と同様に、本書もまた成立に関しては、問題が存すると考えられる。つまり、上下巻がともに序文の撰述された万暦二六年頃に同時に成立したものかは検討の余地がある。これについて問題となるのは、劉觀文「雪浪集叙」の次のような記載である。

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

以前、私は雪浪と山中で話をしたが、彼が説く『易』や『論語』『楞嚴經』、『涅槃經』の旨の是非はまさに聖人に違わなかった。雪浪の徒弟が一卷を持つてくるに及び、これを読んだところ心にわだかまりがなくなつた。まるで大きな河で逢つても、白雲や霧の立ち込めた水面が形象として立ち現れないようであった。そこに詩の道があるのだろうか。だから私は雪浪の胸のうちに詩はなく、しかしそこに雪浪の詩があるのだと考える。

（嘗与雪浪講于山中、其論『易』、『論語』、『楞嚴』、『涅槃』之旨是非、不謬於聖人。及其徒持一卷來、讀之洒然。若遇於大江之上、而白雲烟水亦不得結為色相。有詩之道也乎。故吾觀雪浪胸中無以有詩也、而乃其有雪浪之詩<sup>20</sup>）

劉觀文は、雪浪の徒弟が一卷の雪浪の著作を持参したことに対して、雪浪の詩の評価を行い、雪浪が詩の道を目指して懸命に作っているのはなく、雪浪の透き通つたような胸の内が詩として表れている、というような高い評価を行っている。雪浪の徒弟が彼の著作一卷を劉觀文に持参したのは、『雪浪集』の刊行に際して序文の撰述を請うためであろう。

ここで問題となるのは、劉觀文はその巻数を一卷と記録し、その内容が詩のみであるかのように記している点である。つまり、この序文からは現存する版本のうち巻上に当たる部分

のみを見て劉覲文は万曆二六年（一五九八）に序文を記したのではないかと推測できる。

本書は無刊記であり、刊行年は未詳である。劉覲文の序文や、上巻の詩傷の中で作成年次の明確なものの中で万曆二六年を下るものは見当たらないことや上述の劉覲文の序文の内容から見れば、少なくとも詩を中心とした上巻は万曆二六年には成立していたと思われる。

では、下巻の成立はどうであろうか。「門弟子通澤」という人物は未詳であり、『雪浪集』が上下二巻として校訂刊行された時期については、以上の情報からは定かではない。

このことについて参考となり得るのは『雪浪集』と『谷響録』との比較である。両者には重複する内容が以下の通り確認される。

番号	『谷響録』	箇所・丁	『雪浪集』	卷・丁	備考
一	「又答宗伯公問」	B・八丁裏	「答宗伯公問」	卷下・三六丁表	備考 一―九は文字の異同はほとんどなく、 ほぼ同一。
二	「雪浪和尚再転語」	B・一二丁裏	「又」	卷下・三八丁裏	
三	「雪浪答語」	B・一五丁裏	「又」	卷下・三九丁裏	
四	「心経説」	B・一八丁裏	「心経説」	卷下・四〇丁裏	
五	「護童子経跋」	B・二〇丁裏	「護童子経跋」	卷下・四二丁表	
六	「浄頭問法記」	B・二二丁裏	「浄頭問法記」	卷下・四三丁裏	
七	「示優婆夷法語」	B・二六丁裏	「示優婆夷法語」	卷下・四七丁表	
八	「西林寺太空朗上座欲超方礼五臺 叅舅殊求示」	B・二七丁裏	「西林寺太空朗上座欲超方礼五臺參舅殊求示」	卷下・四八丁表	
九	「為陳仲醇跋董太史画冊」	B・三〇丁裏	「為陳仲醇跋董太史画冊」	卷下・五〇丁表	
一〇	「小像自讚」	B・三二丁表	「自題小像」 「門人求自賛」	卷上・五九丁裏 卷上・六〇丁裏	

この比較から確認できるのは、次の二点である。

一、『谷響録』B部分と『雪浪集』巻下の一部は共通する部分が多数あり、文字の異同もほとんどない。このことから、『雪浪集』巻下の一部は『谷響録』B部分を底本としてしていると推測できる。

二、『谷響録』C部分と『雪浪集』に共通する箇所はない。このことから、『雪浪集』巻上下の成立時において、『谷響録』C部分は参照されなかった可能性が高い。換言すれば、『谷響録』C部分の成立は『雪浪集』成立の後であると推測できる。

この二つの点から明確に知られるのは、『谷響録』の成立について、『谷響録』のB部分とC部分が、間に『雪浪集』巻上を挟んで段階的に成立したことである。

この比較において『雪浪集』の成立に関して考えなければならぬ問題の一つは、『谷響録』B部分に含まれる「小像自讃」が、内容としては『雪浪集』巻上の「自題小像」と「門人求自賛」の二つに相当するが、以下のように文字の異同が極めて多いことである。

『谷響録』「小像自讃」

尔欲肖我、我不類尔、坐断崑崙、従人比擬

少小时自塗自汗到如今要遮要護只為周遮反成露布道不如

依旧本来人任従渠説縁説故

『雪浪集』「自題小像」

爾欲肖渠、渠不似爾、坐断崑崙、憑誰比擬

『雪浪集』「門人求自賛」

少小时自塗自汗老大来要蔵要護只為周遮翻成露布到不如  
依旧本来人任従渠説縁説故

この贊の文章は四言や五言ではなく、各句の字数が不揃いで読みにくいこともあり、どちらの文が正しいかは筆者には判然としない。両者の違いは「到」と「道」といった音通の字もあれば、「我」と「渠」、「到如今」と「老大来」といった語彙が異なるものもある。この状況から考えれば、『谷響録』B部分に含まれる「小像自讃」と、『雪浪集』巻下に含まれる「自題小像」や「門人求自賛」の成立の前後関係の特定は困難であり、あるいは、それぞれ異なる底本があった可能性もある。

このような状況から推測されるのは、『谷響録』と『雪浪集』の成立についての二つの可能性である。第一に、『雪浪集』巻上と巻下の編纂の時期は前後しており、巻上の編纂時には『谷響録』は参照されず、巻下が編纂された際になって『谷響録』は参照された。第二に、『雪浪集』の編纂時に参照された『谷響録』の初刊本に「小像自讃」は収録されていないかった。この二つの可能性について、現時点で他に参照すべき資料が確認できず、これ以上の詮索はできない。したがって『雪



浪集』二巻も『谷響録』の成立と同様に明確な刊行年は不明とせざるを得ない。

『雪浪集』巻下の成立年を考えるうえで、その内容面から述べれば、作成年が明記されるもので万暦二十六年を下るものは見られない。その中で筆者が内容的に注目するのは管志道（一五三六一—一六〇八）に宛てた書簡、「答東溟居士書」の次のような記述である。

世の中の情勢が衰退し混乱してきているこの頃、しばしば法門で龍象を称するものが、名誉を毀損されたり、死刑に処されたりしている。私は僭越にも名徳の一人とは言えないが、慇懃謙虚にしていたため、幸いにもこのような目には遭わなかった。それは、みな仏祖のご加護のお陰でしょう。前に罪を許されたことから、今後はただ山林に潜むべきであり、街にでて教化することはできません。（中略）私は六月十二日にやっと雪浪につきました。

（世道交喪之朝、近見往往法門称龍象者、不罹毀辱、則遭刑傷。僕雖不敢自僭於名徳之例、而拳拳以卑自牧、故幸不遭此事、皆從仏祖加庇。前以宥過、而今而後、但宜潛山林、不可興化市塵也。（中略）貧道以六月十二日始抵雪浪。（後略））

ここで注目されるのは、第一に法門の龍象と呼ばれる人々

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

がたびたび災いを被っていること、第二に雪浪自身も何らかの罪を得たのち許されたと記されることである。「法門称龍象」が誰を指すのか具体名は記されないが、思い起こされるのは憨山が万暦二十三年（一五九五）に下獄され僧侶の身分を剥奪されて南方に流されたことや、紫柏真可が万暦二十一年に妖書事件により獄死したこと、及び、李卓吾が万暦三十三年に獄中で自害したことである。もし雪浪の言がこれらのことを指すのであれば、この手紙の成立、ひいては『雪浪集』巻下の成立および刊行は万暦二十六年より下ることとなる。また、雪浪自身の「宥過」は『万暦野獲編』『雪浪被逐』に記される事件を示す可能性もある。その場合、本資料は重要な意味を持つが、これらは推測の域を出ず、現時点では上記の可能性のみを示すのみとする。

## 二一三、『雪浪統集』

- ① 一卷、刊本、沈顥「雪浪統集叙」（万暦四三年）（二六一—五）、管覚僊「雪浪統集後語」（万暦四六年）（二六一—八）、『禪門逸書』統編第二冊所収

「雪浪統集」の名称は『谷響録』中にも掲げられるが、内容的重複は見られない。また、本書中の冒頭の内題は「雪浪統集」であるが、本文中に付されるいくつかの内題や版心題

は「続雪浪集」となっており、書名には混乱が見られる。

本書の成立は、管覚僊「雪浪続集後語」によれば、『雪浪続集』は在俗の弟子である管覚僊が三〇年にわたって雪浪に従う中で収集したものを、師の没後に刊行したものである。

本書の刊行は管覚僊「雪浪続集後語」の記された万曆四六年（一六一八）以降であり、前述のように、『谷響録』所収の「雪浪続集」とは刊行に関して関係があるものと思われる。

管覚僊とは呉門の在家居士で、愁山「毗耶室銘」に記録がある。それに拠れば、彼は早くに仏教に帰依し、妻子をもたず、街に毗耶室という一室を設け十方の僧に飯食を提供していた。また、『谷響録』にも「為雲山管居士題覚僊偈」（四七丁裏）という五言律詩形式の偈が記される。

本書の内容は雪浪の詩をその形式によって分類して並べたもので、「五言古」「七言古」「五言律」「七言律」「五言絶」「六言絶」「七言絶」、計一九一篇の詩を収める。

詩の内容から見れば、本書自体に一部の詩の重出があり、さらに『雪浪集』との間にも一部の内容的重複がある。また、上述の管覚僊の後語の内容から見ても、その内容の成立時期は幅広いものである。ただし、『雪浪続集』は『雪浪集』と異なり、最晩年の望亭における飯僧に関する詩も見られる。この事から、雪浪が南京を追われたのちの消息や思想を明かすことのできる資料として位置付けることができる。

### 三、まとめ —— 雪浪の著作諸本の関係について

以上、雪浪の著作として残る『谷響録』『雪浪集』『雪浪続集』三種の詩文集の成立について検討を行った。『谷響録』にせよ『雪浪集』にせよ、それぞれの関係性等から検討を行えば、その成立の過程は単純なものではないことがわかる。不明な点も残されているが、本論の検討から明らかになったのは、以下の点である。

(一) 内閣文庫本『谷響録』の末尾に掲載されている草書体の識語は、『谷響録』の再編纂時に記されたものではなく、その作者である耶溪志若は再編纂には関わっていない。

(二) 『雪浪集』の巻上と巻下の成立の時期は同一ではなく前後する。巻下にのみ『谷響録』B部分の影響が見られる。

(三) 『谷響録』のB部分のうちの少なくとも大部分は万曆二一年の編纂であろうが、C部分は初刊時（万曆二一年）に編纂されたものではなく、『雪浪集』巻下を挟んで後になって成立したものである。C部分の編纂、つまり『谷響録』の再編纂には、『雪浪続集』を編集した管覚僊が関わった可能性の方が高く、その時期は『雪浪続集』

の成立、つまり万暦四六年に近い時期であろう。

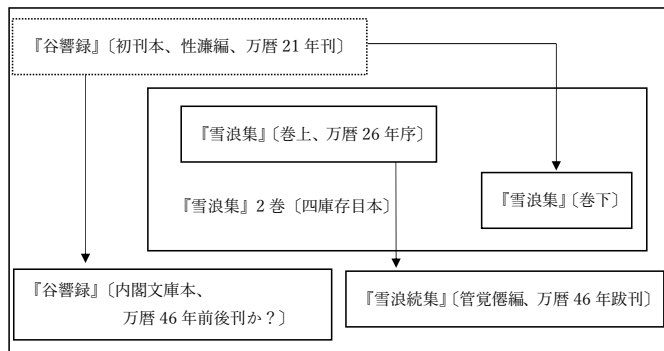
(四) 『雪浪集』と『雪浪統集』には内容的重複が存するが、『谷響録』と『雪浪統集』には内容的重複は存在しない。これらのことを踏まえ、各版本の成立的關係をまとめれば、下図のようになる。

書誌学的な観点から見れば、それぞれの成立年代が確定できない以上、これらに収録される詩文の成立下限の確定は困難であり、内容から成立年代の知られる作品は別として、成立年代の確定できない詩文によって雪浪の行状や思想の変化を探ることは難しい。ただし、中でも成立の下限が明確である『谷響録』B部分や『雪浪集』巻上に掲載される詩文と、晩年のものも含まれる管覚僊編『雪浪統集』の詩、及び『谷響録』C部分とを比較すればその思想的变化を読み取ることのできる可能性はある。ただし、『雪浪統集』や『谷響録』C部分も必ずしも晩年の作品のみを収録するとは限らない点にも注意する必要がある。

このような諸本の状況を踏まえ、今後は本論の中で述べた雪浪の思想に関する諸々の問題についてこれらの著作から検討を行い、居士と僧との関係等を考慮に入れつつ、晩明代における仏教について研究を進めていきたい。

雪浪洪恩の著述の成立論的考察（大澤）

図・雪浪の著作諸本の関係（破線は現存しないもの）



〈キーワード〉 明末仏教、雪浪洪恩、『谷響録』、『雪浪集』、『雪浪統集』

後注

- (1) 吉川幸次郎「居士としての錢謙益」、『吉川幸次郎全集』一六、筑摩書房、一九七〇年、四二頁。
- (2) 大澤邦由「雪浪洪恩の行状とその評価について」、『駒澤大學仏教学部研究紀要』八〇、二〇二二年三月。
- (3) 錢謙益著、錢仲聯標校『牧齋初學集』卷八六、上海古籍出版社、二〇〇九年、下冊、一八〇〇頁。吉川氏前掲論文に引用されている。
- (4) 『憨山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七八頁下段。
- (5) 錢謙益『楞嚴經疏解蒙鈔』卷首之一「古今疏解品目」、「卍統藏」第一三冊五〇五頁中段。『憨山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七八頁下段。
- (6) 『雪浪集』卷下、『四庫全書存目叢書』集部一九〇冊、齊魯書社、一九九五年、七一八頁。
- (7) 一雨通潤『楞嚴合轍自序』、『楞嚴經合轍』卷一、『卍統藏』第一四冊二六八頁下段。
- (8) 例えば、『楞嚴經疏解蒙鈔』卷二において錢謙益は、溫陵戒環の解釈を抄録した後に「雪浪解は溫陵に依る（雪浪解依溫陵）」（『卍統藏』第一三冊五七〇頁中段）と述べており、雪浪の注釈が戒環と同様であったことを示している。さらに、『楞嚴經』卷三の「又た汝の識心と、諸の思量とは、了別性を兼

ねるに、為た同か為た異か（又汝識心、与諸思量、兼了別性、為同為異）」という経文に対して、雪浪は「識心は意識を指す。諸思量は即ち意根なり。二法は了別性を兼ね。為た同か為た異かとは、識心と意根とは為た同か為た異かと謂うなり（識心指意識。諸思量即意根。二法兼了別性。為同為異、謂識心与意根為同為異也）」（『卍統藏』第一三冊六〇三頁上段）と注釈する。この経文は、「識心」と「思量」および「了別性」がそれぞれ具体的に何を指すのかについて、注釈者により意見が分かれるところである。例えば、長水子瑑は唯識学を援用して、「識心は第八なり、思量は第七なり、了別は第六なり（識心第八也、思量第七也、了別第六也）」（長水子瑑『首楞嚴義疏注經』卷三、『大正藏』第三九冊八六六頁下段）とし、識心等に阿頼耶識等を相当させて解釈する。一方、溫陵戒環は「識心は意識なり、思量了別は意根なり（識心意識也、思量了別意根也）」（『楞嚴經要解』卷五、『卍統藏』第一一冊八〇四頁上段）とし、意識と意根という三科の枠組み内で解釈する。これら三者の解釈を比較すれば、雪浪と溫陵戒環の解釈の共通性が見える。すなわち、この経文の含意を、十八界のうちの意識と意根の異同問題に集約させる意味において共通する。錢謙益はこのような意味において雪浪の解釈を「雪浪の解釈は、溫陵（の『楞嚴經要解』）を疎通したに過ぎないのに、講席では新しい解釈だと誇っている（雪浪之解、不過疏通溫陵、

而講席誇為新義」(『楞嚴經疏解蒙鈔』卷三、『卍統藏』第一三冊六〇三頁中段)と批判する。錢謙益は『楞嚴經疏解蒙鈔』において、長水子璿の注釈を正統とする立場から『楞嚴經』注釈史を捉えているため、雪浪の温陵戒環に寄った解釈には否定的であるが、他の経論を参照しなければ理解の難しい長水の解釈に対して、雪浪の解釈は温陵の解釈をより解釈しやすいように示している。この部分の解釈はその特徴を表している一つの例と言えらる。

(9) 『卍統藏』第五五冊四七二頁下段。

(10) 廖肇亨『雪浪洪恩初探——兼題東京内閣文庫所藏《谷響録》』、『漢字研究』第一四卷第二期、漢学研究中心、一九九六年二月。のち、廖肇亨『中辺・詩禪・夢戯：明末清初仏教文化論述的呈現与開展』(允晨文化実業股份有限公司、二〇〇八年、二〇一—一三七頁)に収録。

(11) 国立公文書館所蔵目録に拠る。参考：国立公文書館デジタルアーカイブ：<https://www.digitalarchives.go.jp>

(12) 『谷響録』「谷響録序」、国立公文書館内閣文庫本、「跋」一丁表。

(13) 『雪浪統集』「丙午九日過橋李初度喜同諸法侶」(明復法師主編『禪門逸書』続編第二冊、漢声出版社、一九八七年、一四頁)は次の通りである。

予年六十二、一心隨所自

雪浪洪恩の著述の成立論的考察(大澤)

予は年六十二にして、一心は所自に隨う

禪寂絶思惟、說法離文字

禪寂して思惟を絶し、說法して文字を離る

水月去來踪、谷響人間世

水月、去來の踪、谷響、人間の世

東籬黃菊花、歲歲開相似

東籬の黃黃の花は、歲歲に開くに相い似たり

この句は万曆三四年(一六〇六)、雪浪六二歳の誕生日にその心境を述べて作った五言律詩である。水月も谷響も実体のない幻のようなものの比喩であり、第五句以下は自分の足跡は水に映った月のように実体のないものであるが、詩や説法は谷の響きのように世間にこだましており、それはあたかも東籬の黃菊の花が毎年開くようなものだとの意であろう。確かに「谷響」は「谷響録」をも指しているというようにも読めるが、断言することはできないと考えらる。

(14) 廖肇亨(二〇〇八)、二三五頁。

(15) 劉明芳『宝華山志』卷七、杜潔祥主編『中国仏史史彙刊』第一輯第四一冊、明文書局、一九八〇年、二六一頁。

(16) 廖肇亨(二〇〇八)、二三五頁。原文：「拠其言、今内閣文庫蔵本《谷響録》係為雪浪没後、由後人重新編成的新本、而最早的《谷響録》当是除却附録的二卷本、其附録必為後人所加、而附加者最有可能為古松或志茲二人之一(前者可能性尤大)。

也就是說、在当时小崑山雪浪講經会后刊行、性濂刊梓的《谷響録》是今本存世《谷響録》的「底本」。至於兩本之間的差異、由於性濂的刊本不存（或尚未發現）、無法進一步比對、不過除了附録的部分、兩者的差異應該不大。」

(17) 喩味菴編『新統高僧伝四集』卷二〇、瑠璃經房、一九六六年、第二冊、六九一頁。

(18) 廖肇亨（二〇〇八）、一三四頁。

(19) 『新纂禪籍目錄』、駒澤大學圖書館、一九六四年、二四〇頁。

(20) 『雪浪集』、『四庫全書存目叢書』集部一九〇、齊魯書社、一九九七年、六七四頁。

(21) 『谷響録』に卷数は表記されないため、便宜的に本論四頁の記号をここに使用する。

(22) 『雪浪集』卷下、『四庫全書存目叢書』集部一九〇、齊魯書社、一九九七年、七一九頁。

(23) 明復法師主編『禪門逸書』続編第二冊、漢声出版社、一九八七年、四四頁。

(24) 『憨山老人夢遊集』卷三六、『正統藏』第七三冊七三〇頁中段。

(25) 六言絶句は五言詩や七言詩に比べてその作例が少ないものである。しかし、『雪浪統集』には「六言絶」の部が立てられ、四篇二〇首の六言絶句が収められる。これは、同時期の他の僧に比較しても作例の多いものである。高泉性激（一六三三—一六九五）を中心として、覚範慧洪や明末僧の六言絶句の

製作の状況を研究したものに、野川博之『明末仏教の江戸仏教に対する影響』（山喜房佛書林、二〇一六年）第九章「高泉六言絶句の研究」があり、憨山徳清など明末期の僧の六言詩の作例についての言及があるが、この中では雪浪の作については言及されていない。